

「野生チンパンジーの行動生態学的研究」

マイケル・ハフマン

(生態機構分野・社会生態分科)

生態機構分野は、おもに野生のチンパンジーとニホンザルを対象に研究をすすめている。4月現在、分野の教官は教授上原、助教授ハフマンと助手橋本である。それに加えて、研究員3名と大学院生1名がいる。我々はこれまで日本国内(嵐山、船越山、高崎山、屋久島など)とアフリカ各地(タンザニア:マハレ山塊、ルポンド島、ウガンダ:カリンズ森林、ブドongo森林、コンゴ:ワンバ、ギニア:ボソウなど)、および霊長類研究所内の飼育コロニーで、様々な行動学的・生態学的研究を行っている。

本研究室は霊長類行動生態学を一つの柱として、適応と進化の機構を生態学的視点から解明するために、主として野生個体群を対象に調査を行なっているが、野外で検証しにくい問題を飼育状態の観察によっておこなう実験的研究を行うこともある。ニホンザルに関する採食と栄養生態、性行動と繁殖生態、個体群動態等を環境や社会構造との関係で探求する一方、野生チンパンジーの採食生態や自己治療行動、種間関係、生息環境分析、個体群動態等の生態学的研究や、文化的行動の伝播機構を研究している。

私はニホンザルとチンパンジー両種をそれぞれの複数の野生集団と飼育グループを比較対象として長期行動生態学的研究を行ってきた。今回、長期学際的研究のメリットを強調しながら、野生と飼育上で私が行っているテーマの一つチンパンジーの自己治療行動研究を紹介する。霊長類の自己治療行動研究は新しい分野であり、動物・植物・寄生虫の三者の複雑な関係に焦点を当てている。寄生虫は多くの病気を誘発し、個体の行動全般や繁殖能力に影響を及ぼす。したがってこれらの悪影響を抑制する必要性は非常に大きいはずである。寄生虫感染症が宿主へ与える影響や感染した場合の宿主の反応は、長い進化の産物であることは間違いない。これまでに寄生虫駆除について薬理的および物理的メカニズムを提唱した。例えば、アフリカ類人猿に共通してみられる葉の呑みこみ行動は腸内寄生虫の物理的駆除を通じた腸結核感染症の制御に効果があることを判明した。霊長類の自己治療研究は、自然界の多様性を表す宿主・寄生虫・植物の複雑な相互作用・霊長類の行動生態学・人類の進化過程などさまざまな課題を理解する上で、また一つの斬新な視点を提供するだろう。

参考本: シンディ・エンゲル 2004.2.9「動物たちの自然健康法—野生の知恵に学ぶ」紀伊国屋書店
2003/11/01 出版